
黒月白陽

皷

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒月白陽

【Nコード】

N0450B

【作者名】

皺

【あらすじ】

幼い頃に両親と他界し、その頃の記憶がない青年。千鳥俊哉が大切なモノと引き換えに手に入れた力、本来見る事が出来ないモノを形として視る事が出来る眼。不死なんてモノは存在しない、形あるモノは何れ壊れる、俊哉の眼は全てを形にする、それがどんなモノでも形にし、壊す事が出来る……。この世の全てを壊すことの出来る俊哉に迫る怪異。平穏な生活は一変して崩れ往こうとしている――。

第一章：夏月幻影 前編（前書き）

初投稿です、これから宜しくお願いします。

更新はなるべく早くしていこうと思いますが、内容を深くしたいのでそれなりの時間をかけるつもりなのでそこところは御了承ください。されば幸いです。

第一章：夏月幻影 前編

夏の日差しの中、俺は一人の男に出逢った。

/ 1

九月になつてから数日過ぎた夜に、秋也が俺を訪ねてきた。

「こんばんは。久しぶりだね、俊哉」

玄関口に立つ来訪者は、久しぶりにあつた俺に笑いながら挨拶をする。

「相変わらず学校に出てこないけど、出席日数大丈夫？——
はい、これ」

玄関で靴の紐をほどきながら秋也、手に持っていたノートを俺に渡した。授業中に黒板に書かれたことを的確に記されている。

俺がノートを確認している隙に、秋也は靴を脱ぎ終えて、さつさと俺の部屋に歩いていく。

俺の家はマンションの一室で、玄関からメートルも満たない廊下をぬければ、居間と寝室を兼用した部屋がある。

秋也の後ろ姿を追い掛けるように、俺も自室に移動した。

「ちゃんと学校に行かなきゃ退学になっちゃうよ？ 成績は良いんだからもつたいないよ」

「その時はその時だ。もつたいないも何も俺の勝手だろ」

「……そうだけど。学校をサボるのは良くないと思うよ」

苦笑いしながら秋也は腰を下ろす。昔から秋也は何かとお節介である。——昔と言っても中学時代に知り合ってからだけど。

秋也は部屋の真ん中の方に座り込み、俺はその横のベットに腰をかける。

これから秋也が何をするのかと、俺は観察する。

黒峰秋也と言う名前のこの青年は、中学からの友人である。何事にも積極的だが、流行には敏感でもない、今の世の中には珍しい普通の学生である。

今は俺と同じ高校で生徒会長をしている、そんな中態々俺を訪ねてくるほどのお人よしで御節介である。

髪は黒く、短く切り分けられている、飾り物などはつけたりしない。身長は百七十を越えている。幼い顔立ちで、美男子である。学校ではその容姿に女子が黄色い声をあげるぐらいだ――

「俊哉、ちゃんと聞いているの？」

「悪い、ボウツとしてた」

「だから、神崎の家にはちゃんと顔を出してるの？ 透さんにこの前会ったけど、俊哉の事を心配してたよ」

「ああ、神崎の家にはこれと言って、用がないからな」

「用がなくてもお世話になったんだから、たまには顔ぐらい見せに行くのが普通でしょ？」

「普通も何も俺が会いにいつでも、ろくに会話も続かないし、直ぐ帰る事になるから、距離が開くだけだ」

「そんな事言ってるから余計に距離が開くんだよ」

秋也の言葉に間違いはない、それが分かっているから、俺は余計に不機嫌になる。

自分でも分かっている、でも駄目だ。

幼い頃に俺の両親が他界した、その後、知り合いの神崎家に引き取られた。引き取ってくれた事には感謝しているが、所詮は他人……秋也はやっぱりお節介だ、人の気持も知らないで言いたい放題だ。

千鳥俊哉とは中学時代からの友達だ。

有名な私立の中学の入学式、僕の後ろの席に座っていたのが俊哉だった。

入学当初、期待に胸を躍らせる者が多い中、俊哉は無表情で黒板を睨みつけていた。

前、後ろの席と言うことで僕から話をふったりして、それから僕は、何時の間にか友達になっていた。

何事にも積極的に頑張ろうとするクラスの雰囲気、俊哉は不満そうな顔をしているのが目に映る。

そんな俊哉は、少し長めの黒髪、凛々しい顔立ち、勉強も運動も出来る優等生だった。

そう見えていただけで実際は学業に無関心で運動も嫌々やっていただけであつた。

無表情で口数も少ないと言う事で、俊哉は女子生徒から注目を集めている時期もあつた。

何人もの女子は俊哉に告白し、無残にも撃沈していく、可哀想であるが俊哉は異性にはまったく言ってもいい方ど興味が無いのである。

時にはそれを理由に男子生徒が俊哉に喧嘩を売るのだが、喧嘩を売った男子が逆にやられてしまい、無残な光景を目の当たりにする事も屡であつた。

興味と言う言葉に対して何の思いも寄せない俊哉は、生ける屍ではないのだろうか、そう思っていたが、俊哉にも興味と言うモノは存在していた。

殆どが完璧である俊哉にも苦手な事はある。

身体、学力は万能な俊哉、そんな俊哉は友達を作る事が苦手である。

そして初めて、俊哉が友達と呼べる相手が僕、黒峰秋也であつた。

「殺人事件」

「え——？」

「だから、最近起こってる殺人事件の犯人は捕まったのか？」

ボウツとしてた、秋也が俺の言葉を聞いて、正気に戻る。

「ん、確かまだ捕まってないと思うよ。ちゃんと新聞とかニュース見てる？」

——確かこの近くの公園でも殺人事件が起こったから、夜中は出歩くのは控えたほうがいいよ」

「そうか、近くの公園だな？」

「興味本意で行くのは駄目だよ。俊哉の悪いところだよ、直したほうがいいよ」

「そう言う風に、遠慮なしに口に出すのが秋也の悪いところだ」

少し言い過ぎたと思ったが、秋也は気を悪くした風には見えない。

「そうだね、ごめん」

「いや、俺も悪かった」

一瞬場が静まったが、秋也が何かを思い出したように喋り始めた。

「そう言えば同じクラスの女子が塾の帰りに公園で見たんだって」

「何を？ 幽霊？」

「幽霊かな？ その殺人事件がおきた公園で、長身の男が蹲って、呻いているのを見たんだって」

「――」

思い出した、一週間ぐらい前から噂になっていたな。

深夜に突如現れる、長身の男を見ると呪われるだか、呻き声が聞こえたら、翌朝死ぬ。

実際、この噂を信じているようなやつは相当な臆病者だ。

「その話なら聞いた事がある。最近知った事じゃないから、今の

噂は聞いてないけどな」

「その長身の男を見た人は、自宅で急死をするって言うのが、今の噂なんだけど」

「――けど？」

「実際に急死する人が続出、既に七人は自宅で謎の死を迎えてるそうだよ」

実際に急死と言うのは初めて聞いた、噂が現実になると言うのは本来ありえない。

「俺も夜に公園を散歩するけど、長身の男を視たのだって一回だけだ」

俺には見える、見えると言うよりも視えるが正解であり、『本来見えないモノ』を形にして視る事が出来る。

要するに俺は幽霊でも殺そうとすれば殺せるだろう、形があるの

だから。

不死なんてモノは存在しない、形あるモノは何れ壊れる、なら幽霊と言う形を壊す事だつて出来てしまうのが俺の力だ。

「俊哉が見たつて事はやつぱり幽霊的なモノ？」

「どうだか、邪魔になるような顔で俺を見てる、別に害があれば殺す、害

がなければ別に放っておけばいい事じゃないか。

「何で僕には見えないんだろう？」

「その幼顔がいけないんだ」

幼い顔つきは関係ない、と秋也が拗ねている。

その仕草が妙に似合っている、やはり秋也は顔も幼ければ、心も幼いのか、だからそう言うモノが見えないのかもしれない。

「なあ、殺人つて——」

「ん？ 何？」

「いや、何でもない」

それを秋也に聞くのは、俺が恐かったのかもしれない。

/ 2

九月も終りにさしかかった夜、俺は散歩をする事にした。

夏の暖かさは既に秋の涼しさへと移り替わり、外の空気は肌寒い。街は夜の闇に包まれ、静まりかえっている。

誰もいない、静かで、寒くて、只暗闇の中に淡い輝きを放つ満月がある。 明かりがない家、明かりはあるが静まっているコンビニ。

——まるで死街のようである。

こんな中で一人で歩くのは、それはそれで落ち着くかも知れない。

——こんな日は目が酷く痛む、視たくもないモノが良く視えてしまつから。

俺は家を出る時、白色のシャツの上に黒色の革製のジャケットを羽織、下は蒼色のジーンズ着た。

ジャケットが厚手の御蔭で、下がシャツでも体を温めてくれる。

外のひんやりとした空気のせいか、暑すぎない。

最初から寒くもなかったのかもしれない。
夜の街へ一歩一歩進み始めた。

誰もいないと思っていたが、街を歩けば人と出会った。
音楽を聴きながら、早足で歩いていく誰か。

生きているのかも分からなく、路地で俯いて座る誰か。
それを横目で観察しながら歩く俺。

——何の為にこんな中を歩いているんだろうか。
今から家に引き返して睡眠をとった方がよっぽどマシである。

いや、俺は夜が好きなんだ、静まり返ったこの夜を俺は求めているのかもしれない。

何の目的もなく、俺は夜闇の中を歩いている。

——幼い頃、俺の両親は交通事故で亡くなっている。

そう聞かされた、俺は幼い頃の記憶がない、気がついた時には俺は病院のベッドの上だった。

身寄りのない俺を引き取ってくれたのが、親の知り合い、神崎と言う家柄の人達だった。

哀れに思ったのか、それとも何らかの理由があったのか、神崎の人達は俺に優しくしてくれた、嬉しかった、その反面、神崎の人達と俺は距離が出来てしまった。

一人になるのが恐いとは思わない、俺の眼には何時も視えている。
交通事故に巻き込まれたのは両親だけではなかった、俺もその事故に巻き込まれていた。

目立った外傷はなかったが、事故から数週間、眠り続けていたらしい。

起きてから、この時はまだ見えなかった、何時だろう。

——思いだした、初めて俺が神崎の人達とあった時だ、それ以来俺の眼には『本来見えないモノが形として視えてしまう』と異常な力を手にしてしまった。

形になったモノに触れた事はないが、きっと触れる事だって、と

思っていた、その通りであつた、触ることも出来るし、壊す事も出来た。

恐くはなかった、そんな無駄な感情は俺に働きかけなかった。

両親の顔すら覚えてない今の俺と、幼い頃に両親に育てられた俺、一体どちらが本当の俺なんだろう。

そんな事を考えながら俺は夜闇を一步、また一步と歩いている。

—— 本当の自分を見つける為に歩いているのだ。

一体どれぐらいの時間を歩いたのだろうか。

気がつくと此処は噂の公園の中であつた、無意識の内にこの場所に辿りついた。

何の変哲もない只の公園、昼は小さな子供達が走り回る、普通の公園である。

辺りの家から明かりが消えている、街の人は眠りに付いている。

時計の針は午前の三時をさそうとしている、こんな夜中に歩いている人はそうはいないであろう。

—— 突如何かの気配を感じ、公園の中央を見ると、薄っすらと影が現れた。

影は段々と人の形になっていく、そう例の長身の男である。

俯き、蹲り、呻いているように見えるその目からは涙と言つ滴がこぼれている。

—— 背筋に寒気が走り、鳥肌になっている。

「不愉快だな、視たくもないモノが視えてしまうと云うのは」

気分を害した俺は公園を後にした、あの男が何をしようが知った事じゃない。

公園から出ようとする俺の後ろで、男の呻き声が背中に響いた。

後編へ続く

第一章：夏月幻影 前編（後書き）

前編の方をお読みくださり、有難う御座います。

後編では戦闘シーンなどを入れていくので楽しみに。

第二章：夏月幻影 後編（前書き）

後編です。

第二章：夏月幻影 後編

/ 3

……

ここは何処だろう、俯いた顔を起すと目の前で男の子が泣いている、その光景がひどく哀しい。

男の子の前には血塗れで倒れている二人の男女、そして彼等に降りかかる雪が美しさと共に悲惨である。

地に降りかかる雪は男女の流す血で紅く、本当に鮮やかな赤に染まっている。

泣き叫ぶ男の子、優しく抱きしめてあげたい、それなのにその場から動けない。

何故なら足が地面に着いていないから、動く事もままならない僕は彼を抱きしめてあげる事は出来なかった。

……

聞きなれた音が聞える、目覚ましの音である、学校に行く為に仕方なく起きる事になった。

……眠い、まだ目の前が霞んで見える、昨晚、夜更かしをしてしまったからか、まだ寝たりないと脳が訴えている。

それでも起きて活動しなくてはいけない、それが学生と言う身分の仕事だから仕方ないのだ。

無意識の内に学制服に着替えている僕、週間となっている行動がいじらしく思える。

——我ながら本当に普通の学生だなと厭きれてしまう。

確か昨晩は俊哉の為にノートを写す作業に時間がかかり、完成と同時にベッドの中で寝てしまったと言う所だろう。

まだ眠いと訴える顔を起す為に洗面所で顔を洗うと、思考がやつとすっきりとしてきた。

最近サボりぎみな俊哉を迎えに行く為に、僕は直ぐに家を出て俊

哉の住むマンションへ出向いた。

俊哉のマンションへ向う途中、珍しい光景を目の当たりにした、あの俊哉が学制服を来て通学路を歩いていたのだ。

「おはよう、俊哉」

急いで俊哉の隣にいく、俊哉は横目で僕を確認するとそのままゆつくりと歩いている。

「珍しいね、俊哉が僕より先に登校しているの」

「別に、行きたいと思ったから実行しているだけだ」

きっぱりと言い捨てると、口を閉じて進行方向へ目を向ける俊哉。

「はい、そう言えば昨日作つといたノート」

「——俺という楽しいか？」

ノートを差し出した僕に尋ねるように聞いてきた、楽しくなかったらいちやいけなものかな、そんな事はないと思うのだが。

自分にどうしてそんな事を聞くのか謎だが、俊哉は僕が邪魔なかな、そう問うのはやめておく事にした。

「楽しいよ」

「——そうか」

そう言つと俊哉はその後黙つて通学路を歩いて、隣の僕には無関心だった。

学校に着くと、僕は何時もと同じように授業を受け、昼食をとり、また授業を受けるといふ学生をしている。

なんて事はない、何時も通りの生活を送っているだけ、只それだけの事。

夕日が校舎を鮮やかなオレンジに染める頃には生徒は帰宅して、様々な行動を起しているだろう。

僕はと言えば、生徒会室で、今後の行事を書き記した紙を印刷機で何枚も何枚も複写している、それが終ればやっと帰宅できる。

夕日は沈み、今度は月が夜を照らしている、何時も通りの光景、もう見飽きてしまったのかもしれない。

家に帰っても何をする訳ではない為、僕はこの夜の街を散歩する事にした。

目的は何もなく、学校から自分の家を目指す道を散歩という理由で歩いているだけである。

——はて、どうして僕はこんな所にいるんだろう。

公園、その真ん中にポツンと僕は立っている、意識が混乱する中、どうしてこんな所にいるのかと思う。

公園は家とは逆方向にあり、そもそも公園に来る予定はなかった、無意識の内に歩いてきてしまったのか。

ふっと公園に備え付けてある時計に目をやると、午前一時を回っていた。

急いで帰らなくちゃ、公園を出ようとする僕の背筋が凍ったような感覚をえた。

錯覚なのかも知れないその感覚、後ろを振り返るのが恐かった、確かに何かがいる、気配が感じ取れる。

辺りに人がいる気配は先程まで感じ取れなかったのに、それなのに後ろには確かに何かの気配がある。

恐い、恐い、恐い。

脳裏にその感情が満たされると、目の前が真っ暗になった。

——目を開けた、目の前には見覚えのある白色の壁。

僕、黒峰秋也の部屋であった、夢だったのか、それとも初めから何もなかったのか、僕は僕の部屋にいた。

ベッドから体を起すが、どうも体調が優れない、妙に体が気だるく、それでいて眠い。

起したばかりの体を再びベッドへ倒すと、そのまま僕は眠った。

「おやすみ」

誰もいない部屋に僕の言葉は呟かれた。

黒峰秋也、彼が眠りについてから一週間が経とうとしている。俺がそれを知ったのは、秋也と学校へ登校した日から三日後、再

び登校した日である。

今は病院で入院しているが、日に日に体は衰弱している、どうしてもそんな事が起きたのか調べる為に、俺は神崎透に会った。

神崎透、俺のお世話になった神崎家の長男であり、過去視と言う力を持つ男である。

歳は俺より二つ上、今は大学に通っている。

「なんだ、俊哉から訪ねてくるとは珍しい事もあるもんだな」

「人を一体何だと思っている？」

目の前の男、透は笑いながら俺の肩を叩いてくる、はっきり言う
と俺はこいつが嫌いだ。

「でっ、俊哉が訪ねてきたって事は訳ありだろ？」

「察しが良くて助かる。随分前になるんだ、秋也——黒峰秋也が昏睡状態になってしまったんだが、その原因が何なのか調べてもらいたい」

透が眼鏡を外すと俺を視ている、疑っているのか、それとも既に何かに気がついていいのか。

直ぐ側の茶色のコートを掴み、それを羽織ると、透は俺を置いて
どこかに行ってしまった、当分は戻って来ないであろう。

待ち呆けているのも癪に障るので、俺も独自に動く事にした。

それからさらに数日、俺は何の手がかりも掴めず、透の家、神崎
の屋敷を訪ねにきた。

「よう、俊哉」

「そのソファー借りるぞ。俺は寝る」

透を無視するように俺はソファーに倒れこむ、眠いはず、どうも
体は眠くても意識は眠くないらしい。

「何か進展あったか？」

「……何もない」

「こっちは手がかりを見つけたぞ」

その言葉に反応するかのように俺は体をソファーから起した、もは

や体の眠気も感じない。

「その手がかりって？」

「ああ、公園の噂を聞いたか？ あの殺人事件があった、長身の男の噂だ、どうやらそれが黒峰君の昏睡と関係しているらしい」

「そうか」

「ちよつと待て」

ソファーから立ち上がり、公園に向おうとする俺を透が止めた、俺が聞いたら直ぐ実行に移すのを察したのか。

「これを持っていけよ」

透の差し出した手にはナイフを持っている、そのナイフを受け取ると実際に握ってみた。

刃は美しいまでに銀に輝いており、柄は真っ赤、一般的にフォルディング式と呼ばれるナイフであろう。

「無いよりマシだろ？」

「——ああ」

無いよりマシ、まあ、その通りである、壊すには道具があれば無いより容易いからな。

そして俺は例の公園へと向った、黒峰秋也を救う為に。

/ 4

——何処だか分からない骨がシン、と軋んだ。

体が震える、この震えは外の空気から来るものなのか、それとも内気から来る寒さなのか。

判断がつかず放っておく事にした千鳥俊哉が悠然と歩を進める。

一步、また一步と進む、その先には例の公園の入り口が見える。

午前三時、静まり返った夜を電灯が照らす。

闇を照らす電灯が公園の前で途切れる、真っ暗な闇が公園を包み込んでいる。

恐れなんて感情はない、その闇に向って俊哉は休めずに歩を進める。

——暗い闇だけの世界。

そんな世界が視界いっぱいに広がる。

息苦しい、只の暗闇が俊哉に息苦しさを与えている。

暗闇の中を見渡すと、やはりここは只の公園でしかなかった。

——自分の知っている世界がこんなにも豹変してしまうものなのかと、視界が全ての真実だと言うのならば。

確かに世界は今、眠りにについているのだらう。

そのあまりにも静かな空間は、どんな寒さよりも心臓を強く締め付ける。

こんな暗闇の中、遙か空の彼方には星が無数の煌めきを放っている、差し詰め何も無い宝箱に無数の宝石をばらまいたのと同じような感じである。

そんな中、やはり公園の中心には、奴の姿がある。

地面に俯く顔、その顔は華麗で、尚且つ威厳があるように見える。手足は細く、きめ細かな白、純白と言ってもいい程白い。

その顔や体を隠すかのように長く伸びた銀色の髪が月の光りで妖しい光沢をおびる。

見た目から年齢は二十歳前後と思われるが、それは一般的な人間の年齢をさし、こう言ったモノをさすのには使わないであらう。

幽霊、一般的にそう呼ばれるが、形があり、触れられれば俊哉にとっては幽霊なんて関係無く、只のモノである。

蹲って涙を流している男、その男の光景には恐ろしさよりも、哀しさが伝わってくる。

「——同情でもひくつもりかよ」

馬鹿にするように俊哉が呟く。

この男の光景を見た者なら誰もが心を惹かれてしまうと感ずるであらう。

華麗で威厳のある顔立ちが公園と言う舞台で輝いていた。

「さて、壊すか」

俊哉の声に気がついたのか、男が俊哉に目を向ける。

その俊哉と男の目が合ったが、もはや俊哉にはかける言葉はない、ましてや幽霊と話せるほど語学を勉強していない。

透から貰った凶器をジャケットのポケットから取り出す、刃が柄から飛び出る。

男の目からは隠し切れない殺意が沸いている。

そんな事をお構いなしに俊哉は歩を進めて行く。

「お前は——何だ？」

静まり返った公園に響く声。

首を傾げる男の顔を見た瞬間、俊哉の中で意識が途絶える、一瞬、ほんの一瞬だけ途絶え、俊哉は片手で頭を抑えながら今起きた異常へ思考を向ける。

「——何をした？」

男は驚いた、目の前にいる青年の意識を奪おうとしたのに、一瞬で意識を持ち直した事に。

相手の意識を奪い、心を破壊するのが男の力。

しかし目の前の青年にはそれが効かない、効いたと思った瞬間に意識を回復させた。

そんな意識を奪うと言う力を受けた俊哉は、一瞬だけの途絶えでやり過ごした。

「——」

男はさらに強く俊哉の意識を奪い去ろうと試みたが、俊哉は男の形を完璧に視て、脳へ認識させた。

——目の前の存在は、形となった。

もはやこの男が何であろうと関係ない、形がある以上は壊せるから。

壊すなら核を潰せばそれで終る、この男が何であろうと、形があるモノなら全てを壊す事が出来る。

俊哉は右手のナイフを構えると、目の前の男を睨みつけた。

その間に俊哉の脳裏に先程と同じ、安らかな風景が焼きつく。

——何事もやめて、安らかに眠ってしまおうと言う誘惑が俊哉の

中で起こる。

白、真つ白な空間が目の前に広がりつつあった。

——そこは君だけの場所、さあ、恐れずに目を閉じよう。
そこには恐れる物は無い。感情の自由。自己からの解放。
そこが現実、さあ、目を閉じて、ゆっくりと、安らぎの中に自分を歩ませよう、さあ、行こう、行こう、行こう、君だけの現実へ、
行こう、行こう——行けよ！

「ふざけんな」

俊哉の目つきが鋭利な刃物のように男を見つめる。

そんな解放的な誘惑は俊哉には効かなかった。

「俺にはそんな解放的欲求はないんだよ。俺に解放があるとすれば、俺が死ぬ時だ」

俊哉にとつて解放とは死の事であり、現実からの逃避は解放とは呼ばなかった。

「——嘘だ！」

「さて——秋也を返してもらうぞ。あいつは俺の友達だからな」

男の肩を左手で掴むと、俊哉の目前まで引つ張り上げられる。

俊哉の脳へ直接語るように男の声が脳裏に響く。

行け、と。

脳に響いてくる男の声を無視して俊哉は言い返した。

「——おまえが逝けよ」

男の体に銀色に煌めく刃が走る、物体を解体するかの如く刃が走った所はバラけていった。

男に激痛が走る、死の痛みである。

今まで人の形をしていたモノは無残にも原形をとどめてはいなかった。

ばらばらになったそれを背中に、俊哉は闇の中へ消えていった。そうして俊哉は公園から去った。

何だろっ、体が軽い、僕は——。

「おはよう。 秋也」

瞼を開けた僕の横には俊哉が座っていた、何だろう、随分会ってなかったかのように懐かしい。

随分、そう、本当に僕は何日も眠っていたらしい。

「うん、おはよう。 俊哉」

何だか分からないが、僕を何処からか助け出してくれたのは目の前にいる、千鳥俊哉。

——そんな気がする。

「学校、大分サボってるぜ？」

「俊哉、これはサボってるとは言わない気がするけど？」

俊哉の拗ねた顔が目に映る、ああ、懐かしいな。

ジャケットを掴んで俊哉は病室から出ようとす。

「——俊哉」

「また明日な」

そう言つとドアを開けて出て行つた。

どうせ学校をサボってしまうのにまた明日な、は反則だ。

終了

第二章：夏月幻影 後編（後書き）

今回の投稿日は未定ですが、また前編後編と分けます。

第三章：秋風闘乱 前編（前書き）

テストも終わったので第三章を更新です、良ければ第一章からお読みください^^

第三章：秋風闖乱 前編

秋、猛暑の夏から季節は秋へと移り変わる。

涼しげな秋の風を背に、青年はその瞳に何を映すのだろう。

/ 1

九月が過ぎ去って、秋と言う季節に移り変わる、そんな僕の周りでは何時も何かが起ころうとしていた。

久しぶりに会った友人は変りなく、何時も通りの高校生活を送り、突然の昏睡状態になったりと、自分でも驚いている。

そんな僕、黒峰秋也の秋が、慌ただしく始まるうとしていた。

今日は土曜日、学校が休みで暇を持て余していたので久しぶりにクラスの友達と遊びに出かけ、気がつくと世界は深い闇の中、終電にはもう間に合わないだろう。

他の友達はいくや、タクシーを捕まえて帰っていったが、余分なお金を持ち合わせていない僕は、歩いて帰る事にした。

家まではそう遠くないので、ゆっくりと道を歩いていく。

十月の十四日から次の日の十五日に日付は移り変わっていた。

人が寝静まった夜の街を、ひとり歩く。

突如雨が降ってきた、傘がないので雨がしのげる場所へ走る。

路面は雨で濡れ、雨音が耳に聞こえてくる。

衣服が濡れて体温が奪われる、湿った服にうんざりしている僕の前には二人の人影が現れた。

一人は、大きなトランクケースを両手に持ち、黒いスーツを着た女性。

もう一人は、リュックを背負って、今時の流行と思われる衣服を着込んだ青年。

青年は必死な顔で後ろに迫る女性から逃げるようにこちらに向って走ってくる、女性は目をひきつらせながら、その青年を追うようにやはりこちらに走ってくる。

三、二、一、やはり青年は僕に気づいてなかった、その為青年と僕は衝突した。

初めに言っておくが、僕はまさか衝突するなんて思ってもなかった、別にこの人達と関係を持ちたいと思ひ避けなかった訳ではない。「痛……」

青年は足首を挫いたらしく、その場で足首をおさえながら痛がつている、僕はお気に入りのズボンが泥水で汚れてしまった事にガツカリしている程度である。

「ごめんね、大丈夫？」

僕に手を差し伸べてくれたのは青年を追っていた女性であり、もう片方の手で青年の襟を力いっぱい掴んでいる。

「——はい、大丈夫です。そちらの方は大丈夫ですか？」

「大丈夫よ、大丈夫じゃなくても大丈夫よ——多分」

女性の方をよく見て見ると、髪は長く、顔立ちとは女性としては珍しいほど凛々しく、ちよつと眼つきが悪いかな、と思うが、これを世間では美人と言うのかも知れない。

青年の方は蒼く澄んだ瞳、髪は短めに切り揃えられ、一般的にはカッコいいと呼ばれる男の子ではないのだろうか、そんな青年が怨めしそうな目で僕を見ている。

「——姉ちゃん、命だけは助けてください」

「駄目よ、私から逃げた罰は重すぎるんだから。とりあえずホテルでも探すわよ」

どうやらこの二人は姉と弟と言う関係らしい、その割には弟君の方はやけに姉に弱い、そんなイメージが頭にある。

「あの、良ければ僕の所へ来ますか？」

「あら、本当にいいの？」

目を丸くして僕を見ていた女性の方が訊ねてきた、僕はそれに頷いた。

「僕は最近一人暮らしを始めたんで、そんな何もない僕の所で良いならどうぞ来てください。夜も遅いんで今からホテルを探すのも

大変だと思っんで、最終的な判断はそちらにお任せしますよ」

本当にまだ何も無い、俊哉が一人暮らしをしているのを見ていての憧れから、親に相談して家賃の安めなアパートで生活を始めたのである。

青年は浮かない顔でいるが、女性の方は満面の笑みで喜んでいる、これを人助けと言うのかな、何だか嬉しい。

女性が青年の手を取ると、青年は立ち上がった。

僕は知り合ったばかりの二人と、夜の街を歩き始めた。

女性の名前は草壁詩織、青年の名前は草壁隼人、二人は世界を旅して回っているらしい、この二人は若く、隼人君の方はまだ十六歳で高校一年生のはず。

——詩織さんの方は年齢を聞いた瞬間に右拳に異様な殺気を感じた為、聞くのをやめる事にした。

「まだ歩くの？ 何だか疲れたわ」

「もう少しで着きますよ、お疲れのようですけど、何かあったんですか？」

詩織さんは本当に疲れた顔をしている、理由を聞いたが、何となく分かる気がする。

「このバカが私から逃げようとしたのよ、それを追うのに時間がかちゃってね」

隼人君の頬を引っ張り、詩織さんを見ていると逃げたくなる気持ちも分かる。

「姉さん、痛い、痛い」

「あら、ごめんなさい。 本気で引っ張ってたわ」

そんな会話が続く中、やっと自分の住むアパートまで戻ってきた。自室に來ると詩織さんは勝手に境界線を作るとそのまま寝てしまった。

「すいません、本当に姉が迷惑かけて……」

申し訳ないような顔で正座する隼人君の肩に手を載せる。

「——大変だと思うけど、挫けたらそこで終りだからね」

「はい、本当にありがとうございます」

今は夜中の三時、そろそろ寝ところと目覚ましを設定していると、隼人君は既に深い眠りについていた、僕もつられるようにソファアの上で眠りについた。

……眠りにつく前に、詩織さんが持っていたトランクケースから血の匂いがしたのが気になったが、疲れのせいか何時の間にか意識は遠のいていた。

翌朝。目覚まし時計の音と共に目を覚ますと、隼人君がキッチンの方に立っていた。

こちらが起きたのを察したのか、僕におじぎをした。

境界線の先を見ると詩織さんが衣服を乱しながらまだ寝ている、境界線の先はと言うと、本来は僕の寝室である。

「すいません、迷惑かけて。昨晚のお礼と言ってはなんですけど、朝食の方を作りましたので召しあがってください」

テーブルに並ぶ数々の料理、どうやら調理に使用した材料は元々隼人君が所持していた物だと思う。

旨そうな香りが部屋を包む、その香りにつられて詩織さんが起きてきた。

「姉さん、おはよう」

「——」
どうやらまだ寝ぼけているような顔でテーブルの上に並ぶ料理を見ている。

その後本格的に目を覚ました詩織さんを中心に朝食を食べ始める。朝食の最中にテレビをつけると、また不可思議な事件の事を盛り上げているニュース番組が映りだした。

現場にいるニュースキャスターがその事件について語る。

大分前からある廃ビルの中で、男性三人の遺体が発見された。

三人の遺体には、何者かの手によって体中に締められたような痕が残されている、遺体の口元から血が出て、現場は血の臭いに包まれているようだ。

その廃ビルがある場所はここからそう距離はない場所にある。

——その体の締められた痕は、普通の人間の力とは思えない程の力がかかっていたのが見ただけで分かる。

その事をニュースでは追求する事はなく、被害者の身元を公開し始めた。

被害者の二人は高校生の少年、現場近辺でよく遊んでいる不良であつた、もう一人はその少年達の先輩であり、薬の販売などを仕事にしていたらしい。

そんなテレビのニュースに場が暗くなつてしまつたと思い、テレビの電源をきつた。

「さて、私達はそろそろ行くわ。いろいろありがとね」

そう言うのと急にトランクケースを持ち、早々と玄関まで歩いて行く。

「もう少しゆっくりして行つても良いんですよ？」

「いや、多分もう会う事はないさ」

「——姉さん。秋也さん、ありがとうございました」

そうして、二人は去つていった。

その去り際の二人の顔は、どこか寂しそうに見えた。

/ 2

あの夜に知り合つた二人の一件が終り、学校が始まつた。

僕が通う高校は、有名な私立高校であり、その高校の生徒会長を僕が勤めている。

生徒会の責任者である僕の仕事は簡単なものではない、時間をかけてやる事が山積みであつた。

行事を取り仕切るにあつたの行動、その資料を掲示したりと忙しい。

そんな高校生活が今の黒峰秋也の日常である。

この日常に文句はない、むしろ感謝している、こんな僕でも人の役に立てるものだ実感できるからであり、今は幸せである。

—— そんな事を思っていると学校へ辿りついた。

校舎は四階建て、生徒会室は三階にある。

校舎の周りは木々が生い茂り、自然がいっぱいPRしているだけあって都心よりも空気がうまい。

校舎の建築に多大な金を使用しているが、やはり学校と言うだけあってエレベーターは備え付けられていなく、階段で生徒会室まで歩いて行く。

生徒会室の扉を開いて、膨大な資料が整理されてならぶ棚、そんな何時も通りの光景の中にまったく言ってもいい程似合わない姿がひとり。

この学校指定の制服を身に包んだ青年が、きりつとした眼差しでこちらを振り向く。

「俊哉？ どうしてここにいるのさ」

「お前に会いに来るにはそれなりの理由が必要なのか？」

理由と言われると困る、僕に会う為に来てくれた事は嬉しい。

「いや、理由なんていないけど……」

—— 反論がまったく出来ない、俊哉との会話は何時もそうだ。

「なら良いじゃないか。—— 今日会いにきたのは近頃起きたあの事件についてだ」

事件、廃ビルで起こった三人の猟奇殺人事件の事だと直ぐに分かった。

「あの事件、俊哉はなんだと思うの？」

「—— おまえが意識を失った事件、あれと関係していると思う。最近この街に異様な気配を感じる、透も察していると言っていたからな、気のせいではないと思う」

夏、僕はある事件に巻き込まれ、意識を失っている時期があった、それを救ってくれたのは目の前にいる、千鳥俊哉だと僕は思う。

「俊哉はどうする気でいるの？」

「何か起こる前に俺が犯人を消すさ」

俊哉は言った事を必ず実行する、犯人を消す、犯人を殺すという事だろう。

そんな権利が俊哉にあるのだろうか、僕は俊哉の事を分かったふりをしているだけで、実際のところは何も分かってはいない。

それだけ言っていると俊哉は僕を残して生徒会室を出ていった、これから何が起こるか僕はまだ分からなかった――。

秋也との久しぶりの会話を終えた俺は家に帰宅して眠りについた。現在の時刻は午後十一時二十三分、夜の散歩としてはまだ少し早いが、今日は憂鬱で時間の流れが遅く感じる、その為今から散歩に出るのも丁度いい時間だと思い、俺は何時ものジャケットを羽織、家を出た。

今日の夜も月が綺麗に世界を照らしている、そんな世界の片隅を歩く俺、何だか酷く切ない――。

なんだ、こんな感情がまだ俺にはあったのだろうか、今の俺に感情はない、俺は俺であり、千鳥俊哉ではない。

――千鳥俊哉は死んだ、交通事故で千鳥俊哉という記憶と共に千鳥俊哉は死んでしまったんだ。

今の俺は千鳥俊哉という名前を借りただけ、俺は誰なんだろう。

――そんな事を考えながら道を歩いていると、あるアパートの前にたどりついた。

黒峰秋也の住むアパートの前である。

どうしてだろう、こんな所に来る予定はなかった、俺は知らない間にここにたどりついた。

「あれ？ 俊哉じゃないか。 僕にまだ話があるの？」

とっさに後ろを振り返るとそこには秋也が立っていた。

「――違う、俺は違うんだ」

違う、俺はここに来る事なんて考えてなかった、違うから俺は直

ぐに立ち去った、秋也の視線を背に受けながら、俺は逃げた。

走った——秋也の住むアパートから大分離れた、ここは公園、俺がここに来るのは幽霊事件以来である。

腕の時計を確認すると、既に午前零時を過ぎている事に気がついた。

疲れた、疲労が体を重くする、ここで一休みしてから戻るか。

——誰だ、誰もいないと思っていた、いや、いなかったんだ。つい先程まではいなかった、俺が気づかぬ間に公園の中へ入り込んでいた。

その男が立っている場所、それは俺が壊したモノが散らばった場所、誰にも見られずに散らばったはず、だが目の前の男は的確にその場所に立っている。

「……お前は一体」

思わず口に出した言葉、その言葉を聞いた男がゆっくりと振り向く。

「——六道総志」

そう言う男の周りに土煙が吹き荒れ、それが収まると同時に姿を消した。

六道総志と言う男が事件に関係している事は確かである、俺は徐々に夜空に浮かぶ月を見上げた、俺が視た月は紅かった——。

第三章：秋風闘乱 前編（後書き）

後編に続きます♪

第四章・秋風闘乱 後編（前書き）

後編です、お読みくださって有難う御座います^^

第四章：秋風亂 後編

/ 3

翌朝、俺は六道総志について調べてみた、調べるあてはあった。

六道という名は神崎の家で聞いた事があった、その記憶を頼りに俺は神崎の家を訪れた。

透は出かけていたが、合鍵を持っているのでお邪魔した。

神崎家の書物庫、膨大な量の本が納められている、その書物庫の奥には神崎家に縁がある者についての資料がある。

千鳥、須賀、草壁——六道、記憶は確かだったらしい、目の前の資料には六道についての事が書かれていた。

六道家とは、千鳥、須賀、神崎などの宗家という事実、そしてその六道家は二十年前にその血が絶ったと記されている。

二十年前、宗家、六道は禁を犯したという事を理由に分家総勢で宗家、六道の館を強襲し、宗家を滅亡に追い込んだ。

六道総志、六道の名を持つ男、一体何者で、何の為に俺に接近した、宗家滅亡を企てた分家への復讐の為か、それとも何か他の目的があるのか。

六道に関する書物を鞆に入れ、神崎の家を後にした、今頃学生達は朝礼で校長の演説を坦々と聞いているのだろう。

その中に黒峰秋也もいるはず——俺は秋也と顔をあわせたくない、昨晚の件が理由と言うわけでもない、ただ俺は今秋也と顔をあわせると壊したくなってしまふ、友情も何もかも、全てを壊したくなってしまふ。

元々俺には友情なんてモノはいらなかった、壊れやすい友情はいらない、そう思っていた俺を変えたのが黒峰秋也、壊れない友情だった。

——しかし気がついた、壊れないモノはない事に、自分でよく分かっているそれを忘れていた、だから恐いんだ、今の俺なら秋也を

簡単に壊してしまうと言う事が。

気づかぬうちに歩く速さがあがっていた、目の前には俺の住むマンションが、そのマンションの階段を上がり、自分の部屋にたどり着いた。

玄関を開き、直ぐにベットに俺は倒れこんだ、眠い、何故だか眠い、俺はその欲求を受け入れ、ベットの上で寝てしまった――。

昨晚、千鳥俊哉が僕の住むアパートの前で立ち止まっていた、僕が声をかけると俊哉の肩が震え、こちらに顔を向けた。

俊哉の顔は青白くなって、とても目が怯えている、理由は分からないがそのまま走り去っていった。

何もかも全てを見る事が出来そうな俊哉の澄んだ瞳、その澄んだ瞳が濁っているように僕は見えた。

学校から帰宅した僕はその事ばかり考えている、俊哉に電話をしてみたが一向に繋がる気配はない。

直接俊哉の住むマンションに出向くのは簡単だが、昨日の様子じや会ってほくれない気がする。

思いつめている僕の部屋に来訪者が現れた。

「黒峰、隼人を知らないか？」

額から汗を流し、必死な顔で僕に聞いてくる人は草壁詩織である。

「隼人君がどうかしたんですか？」

「突然いなくなっちゃったんだよ。昨夜までは一緒にいたのに、

今朝急になくなっちゃったんだよ」

必死、詩織さんは我を忘れたようにただ隼人君の名前を僕に語る。ともかく詩織さんをこの状態にしておくわけにはいかないと思い、僕は隼人君を探すことにした。

制服の上にコートを羽織、玄関から詩織さんと共に外に出た、探すあてはないが、探さないわけにはいかない。

街中を走り回った、駅、学校、商店街、そしてたどり着いたのが

――公園。

この公園が原因で僕は昏睡状態になっていたらしい、この公園に来たくはなかったが、僕には分かる。

きつとこの公園の中に隼人君は、詩織さんを背に踏み出した、公園の中へ。

公園の中に入った僕の目に映る光景、隼人君と誰だか知らない男が睨み合っている。

「隼人！」

詩織さんが声を上げた直後、隼人君がこちらに顔を向けた――

――その一瞬、ほんの一瞬で隼人君の左腕が胴体から千切れた。

それに気がついた隼人君の顔が激痛で歪む、左腕と胴体が繋がっていた部分、切断部から大量の出血をしている、地面に滴る血は鮮やかな模様を作っている。

男がこちらに視線を向けてきた、その視線は僕の心臓を鷲掴みにしている。

「――よくも隼人を、ぶつ殺す」

僕の後ろから勢いよく詩織さんが飛び出した、片手にはトランクケース、そのトランクケースが開く。

中から大きな人形が姿を現した、その人形に付けられている無数の糸が詩織さんの細く、しなやかな指にくくりつけられる。

傀儡人形と呼ばれる物である、その人形を操る詩織さんの形相は凄まじい、詩織さんが操る人形が男を殴りつけた。

そのように見えていたが人形の腕が百八十度回転してもげている、隼人君と同じ、一瞬の内に人形の腕は胴体と別れた。

――きつと殺される、僕の脳裏に過ぎった直後、詩織さんの体が宙に浮く。

何かに縛られたかのように動けずに宙に浮く詩織さん、その様子を見ている隼人君と僕。

詩織さんの服に段々と皺が出来ていく、視えない何かに縛られている。

「あ……」

啞然としていた僕達を我に返す事が起こった、目の前で詩織さんの体のいたる場所から鮮血が噴出した。

その血が僕の制服にも飛んできた、コートに滲む血、制服に滲む血——詩織さんの血液だ。

その光景を目の当たりにした隼人君が意識を失い倒れる、詩織さんは既に意識はないだろう、病院に連れていかなければ二人は死んでしまう。

「——病院に」

「必要ない、透に任せる」

僕の言葉を遮るように聞えた声、その声の主は——千鳥俊哉だった。

目の前の悲惨で無残な光景、見慣れているがやはり嫌な気分だ、黒峰秋也を助けに来たわけじゃない、神崎透の依頼で来ただけだ。

数時間前、六道に関する書類を読み返していると、神崎透が俺の家に訪れた。

内容は公園に行けば分かるという単純な事、その見返りとして六道に関する事をいろいろと調べておいて俺に教えるということである。

公園に着いた、むせかえるような血の匂い、案の定地面には大量の血、その地面に転がる人。

そして立ちすくんでいるのは——黒峰秋也であった、会いたくなかった、秋也とは会いたくなかった。

何時の間にか俺は握りこぶしを作っている、爪が手の肉に食い込んで、そこから少量の血が出ている。

秋也が向ける視線の先を視る、そこには見知らぬ男が立っている、どうやらその男がこの残虐空間を作り出したらしい。

男の視線が俺に——直後左腕が何かに縛られたような感覚に襲われる、視線を自分の左腕に向けた俺、その腕には黒い影のような線があった。

その線を自分の腕を傷つけぬように右ポケットに入っていたナイフを取り出して切り裂く。

切り裂かれた線は霧のように散布し消えた、その様子を見ていた男の顔が強張った。

視えないとも思ったのかは知らないが、俺には視えた。

男が俺睨みつける、直後視線を感じた部分を目掛けて黒い線が近づいてくる、その線を掻い潜りながら男に近づく。

無数の線が目の前に迫るが、それをナイフで切り裂くとやはり線は消えた。

「貴様、何者だ。何故縛れない！」

男が近づいてくる俺に向って叫ぶ、何者か——常人ではないな、お互い人としては狂ってる。

「お前の黒くて美しい線——嫌いじゃないさ。俺は縛られるのは嫌いなだけ」

男の心臓を狙ってナイフを突き出す、そのナイフを目掛けては男は左手をかざした、ナイフは男の左手に突き刺さる。

男はその痛みに苦しんだ、左手のナイフを右手で引き抜くと俺の腹を蹴り飛ばして距離をとった。

脆い、人間はこんなにも脆く出来ている、ナイフの刃には男の血がつき、紅く妖しい輝きを放つ、禍々しい笑みを浮べている俺が刃に映った。

「俺は死なない、貴様が死ぬんだ」

男の視線を切り裂く、狂ったように俺は走った、目の前の男をバラバラに壊したい。

その俺の前に一人の青年が立ちはだかった。

——黒峰秋也である。

「俊哉、殺しちゃ駄目だ！」

「——どけ」

男が逃げていく、追わなければいけない、追ってバラバラにしくちやいけないのに、秋也は俺の前に立ちふさがる。

「殺しちゃいけないんだ」

殺しちゃいけない、もう俺は人を殺している——ずっと前に俺は殺している、俺は殺人鬼だ。

「——どけよ」

「どかない、俊哉に人を殺させない」

「お前が死ぬか？」

秋也を押し倒してナイフの切っ先を首筋に向ける、何が起きたのか分からないような目で秋也は俺を見ている。

俺は何をしているんだ、秋也を殺そうなんてどうして思ったのか。分からない、分からないまま俺はナイフを秋也に向け続けている、もう止まらない。

「——駄目だよ、人にナイフなんて向けちゃ」

どうして笑っていられるのか分からない、俺は今秋也を殺そうとしているのに。

「——泣いているの？」

「俺は泣いてない、泣いてなんかいない」

そう俺は泣いてなんか——なら何故目が霞んでいるんだ、俺は泣いているのか。

秋也を殺す事は、今の俺には出来ない。

俺は秋也の上から退くと、ナイフをポケットの中へしまい、秋也の手をとって起す。

「——俺にはお前を殺せない」

「そう言ってくれると思ったよ。 僕達は友達だからね」

そう言いながら秋也は俺に向って優しい微笑を向けた、こんな俺を友達と言ってくれるのは——秋也だけだと思う。

/ 4

あの日から四日の時が過ぎ去った、草壁詩織さんと草壁隼人君は今も病院で入院している。

どうやら草壁家と神崎家は知り合いらしく、神崎透さんが面倒を見てくれるらしい。

この僕事、黒峰秋也は今も尚、つまらない学生生活を精一杯満喫している、千鳥俊哉とは毎日と言ってもいい程顔を合わせている。あの事件以降、俊哉は学校に毎日登校している、理由はどうあれ僕にとつてはこれほど嬉しい事はない。

そろそろ秋も終り冬が来る、公園であつた謎の男については分からない事だけである。

僕の知りえないところでいろいろな事件が起こっている、その事に僕は巻き込まれている。

「俊哉、今日も元気そうだね」

「何処をどう見たら元気そうだね？」

学校で朝の挨拶、これが日課である、何時も通り気だるそうな俊哉。

こんな日常がこれから先も続くのか、それとも不意に終つてしまふのか、今の僕には分からない、だから精一杯この時を過ごす、それが黒峰秋也の願いです。

あれから四日の月日が経つた、逃した男の行方は透が調べている。どうやら公園にいた女と男は草壁と言う家系であり、俺や透と同じ六道の分家であつた。

俺事、千鳥俊哉は、あの事件以降は退屈な学生生活に戻つた、黒峰秋也に心配をかけない為に、俺は平凡な生活に戻ってきた。

秋の紅葉も散り、雪化粧が美しい冬へ四季は移り変わろうとしている。

六道と言う宗家が、六道の分家を巻き込もうとするこの怪異な事件への招待状、俺は喜んでその招待を受ける。

「俊哉、今日も元気そうだね」

何時も通りの秋也の朝の挨拶、俺は何時も通り答える。

「何処をどう見たら元気そうだね？」

こんな平穏な日常がこれから先も続くとは思わない、どれだけ長く続ける事が出来るのか、今の俺には分からない、だが俺はこんな

日常が長く続けばいいと願う、千鳥俊哉の小さな願いである。

宗家、六道の分家、神崎、草壁、千鳥、須賀、高城、天道。

別に恨む事ではない、俺は復讐をしたいが為に生きている訳ではない、只己の望むがままに生きている。

俺の行く末は自分が決める、この六道総志が決める、どんな運命が待っているようが関係はない。

邪魔をする者は消す、そう分家は邪魔なだけ、宗家を滅ぼした事に対する恨みじゃない、邪魔だから消す。

秋は終りて冬が始まる、四季が変り往くように、人も変るのさ。

生きてる実感をこの手に、生と死の狭間の中で人はより変り――
そして始まる。

――そう闘いはもう始まっているのさ。

終了

第四章：秋風鬭乱 後編（後書き）

次回の更新はやはり未定になってしまいましたが、早く皆様に読んでいただけるように頑張ります^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0450b/>

黒月白陽

2011年1月7日14時31分発行